

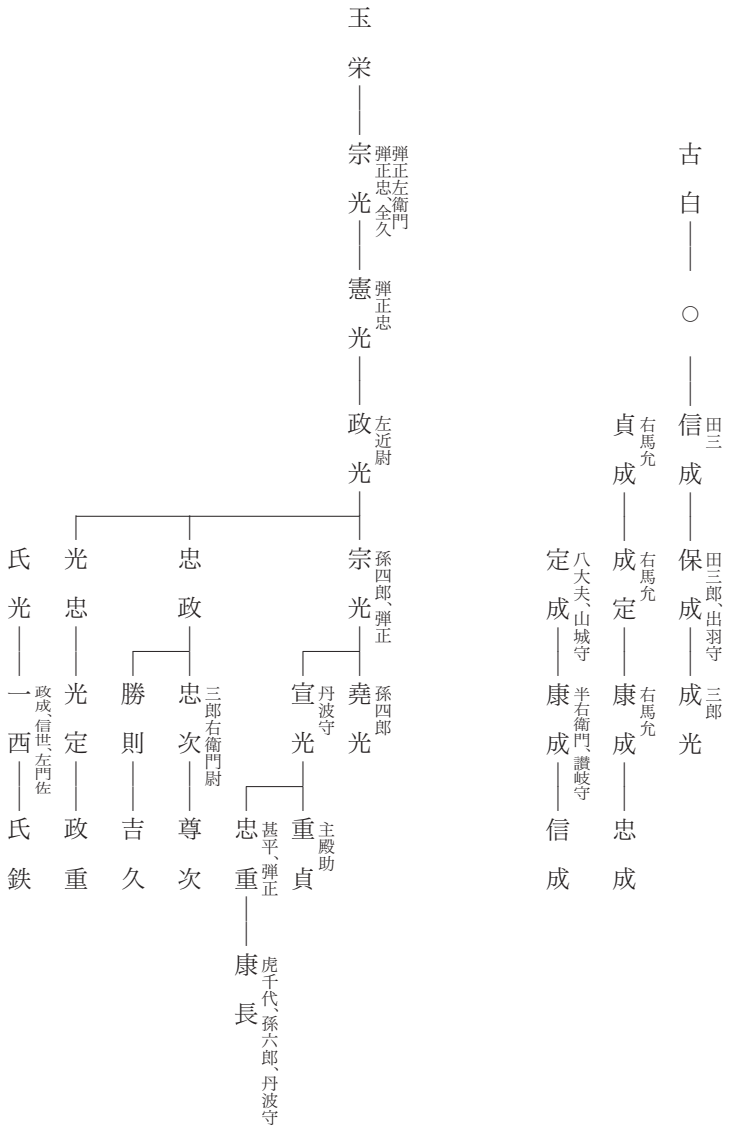
# 戦国時代の東三河

## 牧野氏と戸田氏

山田邦明

● 目 次 ●

	牧野氏系図・戸田氏系図	2
	はじめに	3
一	牧野氏と戸田氏の時代へ	
	東三河という地域	5
	戸田宗光の登場	10
	牧野古白の登場	14
二	牧野と戸田の抗争	
	牧野古白と今橋城	20
	戸田憲光の反抗	25
	戸田氏の勢力拡大	32
三	今川軍の侵攻と東三河	
	牧野保成の要望	39
	田原城の攻防戦	44
	牧野保成の没落	49
四	今川から徳川へ	
	今川と松平の戦い	58
	牧野成定の帰順	65
	二連木と吉田の攻防戦	78
	譜代大名としての展開	71
五	活気づく地域社会	
	大名に米を貸す武士たち	83
	神社造営ブームの到来	89
	古文書にみえる百姓たち	98
	八幡八幡宮の奉加帳	85
	棟札のなかの百姓たち	95
おわりに	戦国期東三河の郷・村	103
	参考文献	104



戸田氏系図

牧野氏系図

今から四五〇年前（一五六四年、永禄七年）、日本列島は戦国動乱の只中だった。ここ東三河の地でも、今川と松平の戦いがくりひろげられ、牧野や戸田といった地域の武士たちは、今川と松平のどちらにつくか悩みながら、時代の動きに身を投じていた。

個性豊かな武将たちが活躍した戦国時代は、現代の私たちにもなじみ深い時代で、それぞれの地域にヒーローがいる。東三河の地でも、牧野や戸田といった武士があらわれて、急速に力を伸ばし、歴史の表舞台で活躍した。牧野も戸田も結果的には徳川家康に従い、遠く離れたところで大名になったから、地域の支配者として続いたわけではないが、彼らにまつわる遺跡や伝承は今に遺されている。この地域の歴史を語るうえで、戦国時代の武士たちは欠かせない存在なのである。

東三河の戦国時代については、古く『渥美郡史』や『神社を中心としたる宝飯郡史』、大口喜六氏の『国史上より観たる豊橋地方』で言及され、四十年あまり前の『豊橋市史』や『田原市史』などの自治体史でも豊かな叙述がなされた。近年は『新編豊川市史』も刊行されている。本書はこうした研究に学びながら、あらためて戦国時代の東三河の歴史を概観しようとしたものである。

この機会に戦国時代の東三河についてまとめたいと考えた理由として思いつくのは、とりあえず以下の二つである。一つは研究の素材となる史料にかかわるが、『愛知県史』の編纂事業の中で、資料編（中世・

織豊しよくほう）の編纂と刊行が進められ、地域にかかわる文書や記録などの史料を容易に手にする環境が整ってきたことである。江戸時代以後に作られた史書なども一定の価値はあるだろうが、まさに戦国時代当時に書かれた文書や記録をもとに、具体的な歴史をあぶりだすことができるようになったし、そうした作業がまずは必要ではないかと思えたのである。

もうひとつの動機は、現在の自治体の枠にとられない、より広い地域の歴史を全体的にとらえてみたいと思ったことである。『豊橋市史』をはじめとする成果は貴重だが、自治体史という性格上、限られた区域の中の叙述が中心にならざるを得ない。戦国時代のこの地域の歴史をとらえる場合には、自治体の枠を超えた広い視野が必要だろうから、現在の豊橋市・豊川市・田原市をまるごとひとまとめにして、地域の歴史を描いてみるのも意味があるのではと考えたのである。

このようなわけで、百年余りに及ぶ時代の東三河の歴史について、牧野と戸田の動きを中心に年代を追って叙述し、最後に地域の人々の活動についてまとめてみた。一般書という性格上、個々の叙述の根拠となった史料はいちいち示していないが、特に記載のないものは、『愛知県史』所収の史料に基づいている。証拠を詳しくくみてみたいと思われる方は、ぜひとも『愛知県史』をひもといて調べていただきたい。

## 一 牧野氏と戸田氏の時代へ

### ● 東三河という地域

現在の豊橋市・豊川市・田原市の一帯は、ひとつのまとまった地域になっていて、「東三河」と一般に呼ばれる。南北に流れる大河、豊川の周囲に一定の平地が形づくられ、豊川の河口から先には三河湾が広がっている。水田や畑が広がり、海産物にも恵まれた、豊かな環境を持つ地域だといえることができるだろう。

国——日本列島に設定された地域の単位。七～八世紀に制度が整えられ、平安時代には六十八の国が揃った。

郡——国の中に設定された地域の単位。郡の数は国によってまちまちだった。

三河は大きな国で、豊川流域を中心とする東部と、矢作川流域をはじめとする西部に分かれる。東西の境の目印となるのは、蒲郡市・幸田町・西尾市の境にある三ヶ根山や、豊川市と岡崎市の境にある山々で、古い時代から東と西に四つずつの郡が置かれていた。東三河の宝飯郡・渥美郡・設楽郡・八名郡、西三河の碧海郡・幡豆郡・賀茂郡・額田郡である。

東三河の四郡のうち、宝飯郡は現在の豊川市と蒲郡市にほぼ相当し、渥美郡は豊橋市と田原市にあたり、豊川を境にして向かい合っている。この宝飯郡と渥美郡の北で、やはり豊川を境に向かい合っているのが設楽郡と八名郡で、設楽郡は現在の新城市（豊川以北）・東栄町と設楽町の南部にあたる。八名郡は新城市の豊川以南

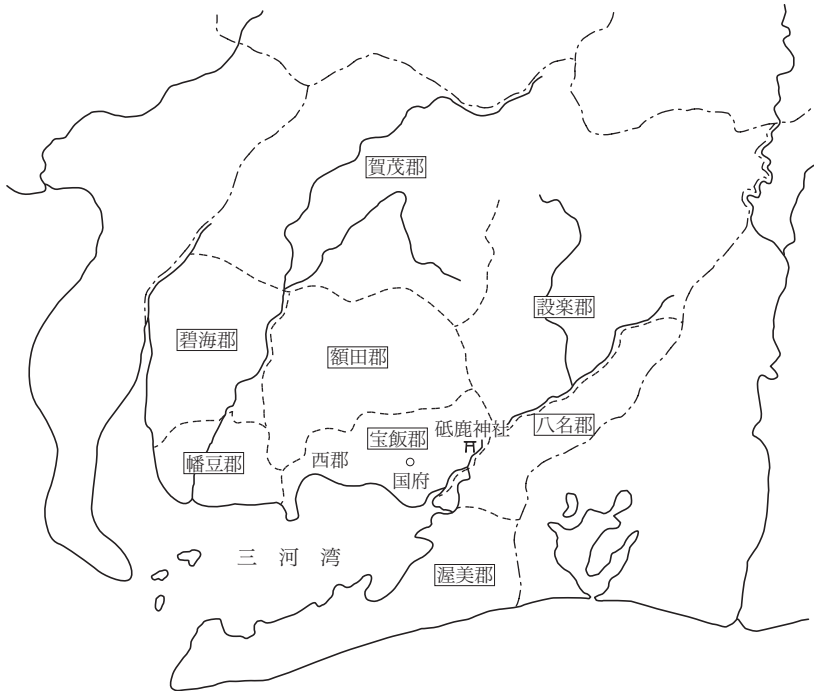


図1 三河国と八つの郡

にあたるが、豊橋市の北部、朝倉川から北の地域も八名郡に含まれる。

このように三河国の東半分の四郡は広い空間にまたがるが、そのすべてがまとまっているわけではなく、いわゆる「東三河」に相当するのは、そのなかの南東部一帯に限定したほうがよいように思える。豊川の周囲に広がる平野は、一宮いちのみやのところまで終わりになり、そこからは狭い谷が続き、しばらく行くと新城の盆地になる。現在の豊橋市・豊川市と新城市の境にあたるところで地域は大きく分けられ、これより北は「奥三河」というほうが適切な山間部になるのである。また現在の蒲郡は宝飯郡の中にあるが、国府こくふのあたりとは山で隔てた別世界になっていて、かつては「西郡」と呼ばれていた。西郡にしのかおり（蒲郡）は三河湾岸の中央にあり、岡崎方面ともつながりが深いので、

一宮——現在の豊川市一宮町とその周辺。

国府——現在の豊川市国府町。

国府——国における政治を行っていた役所。

国司——国の政治を司った人。長官を守（かみ）、次官を介（すけ）という。

一宮——国を代表する総鎮守ともいべき神社で、国ごとに決められた。

砥鹿神社——本宮山の上の奥宮と里宮がある。祭神は大己貴命（おおなむちのみこと、大國主神のこと）。

郡衙——郡における政治を行っていた役所。郡家（ぐうけ）ともいう。

狭い意味での「東三河」には含めないほうがよいように思える。ただ蒲郡市に属している大塚は、「西郡」と山を隔てているので、「東三河」の内ととらえることができるだろう。

地域の把握のありかたは一樣ではないが、本書では現在の豊橋市・豊川市・田原市の市域と、蒲郡市の大塚を含む一帯を「東三河」ととらえて、この地域の戦国時代のことを具体的にみていくことにしたい。

## ●——古代・中世の東三河

豊川市内の国府の地は、古く三河国の国府\*こくふが置かれたところで、国司\*こくしがいて政治を行っていた。また三河の神社の第一位にあたる一宮\*は、豊川市一宮町の砥鹿神社\*とがじんじやである。国府も一宮も三河の東部、宝飯郡の中にあつたわけで、かつてはこの地域が三河国の中心にあつていたことがわかる。宝飯郡の一帯はかつて「穂ほ」とよばれた地域で、郡制が整備されたときに「宝飯郡ほおひんぐん」と表記され、さらに「宝飯郡」と書かれるようになった。渥美郡はかつて「飽海あくみ」とよばれた地域（現在の豊橋市役所の周辺）を中心にしていて、郡衙\*ぐんがもこのあたりにあつたようである。

豊川はかつては「飽海川」と呼ばれ、やがて「豊川」の名が一般化するが、流路は現在とは大きく異なっていたらしい。今の豊川は豊橋公園の北を流れているが、かつての川の本流は、豊川市街の東の崖下を流れていたようなのである。鎌倉時代

海道記——作者は不明。貞応二年（一二二二）の京都から鎌倉への旅のようすを記す。

古宿町——かつて豊川の宿場のあったところと考えられる。

牛久保——現在の豊川市牛久保町。

小坂井——現在の豊川市小坂井町。

摂関家——摂政・関白になることのできる藤原氏の一門。近衛・九条・鷹司・二条・一条の五つの家。

荘園——国司が治める公領（国衙領）に対して、私的な個人や組織の所有地を荘園という。

年貢・公事——耕地に対して賦課される基本的な税が年貢だが、それ以外にも公事とよばれるさまざまな税が課せられた。

伊勢の神宮——天皇の守護神で、現在の三重県伊勢市にあり、内宮（皇大神宮）・外宮（豊受大神宮）などからなる。

伊良湖——現在の田原市伊良湖町。

御厨・御園——厨は台所の意味で、御厨は貴人や神に奉る食事を調達する場所。野菜や果物などを調達するところを御園という。

神戸——現在の田原市神戸町。

に豊川を訪れた旅人の紀行文（海道記）に、宿所を出てすぐのところには大河があったという記事がみえるから、この時代の本流は豊川のすぐ東を流れていたことが確認できる。豊川駅の東の古宿町は段丘上にあり、その東は急な崖になっていて、かつて川が流れていたことをうかがうことができる。豊川の南に進むと、牛久保・小坂井と段丘が続くが、かつての川はこの段丘の東をまっすぐ流れていたものと思われるのである。

平安時代の後期から鎌倉時代にかけて、日本列島の各地には天皇家・摂関家や大寺院などを領主とする「荘園」が広がり、百姓は荘園領主に年貢・公事を納めるようになる。東三河の場合、国府のある宝飯郡においては荘園のひろがりはあまりみられないが、設楽郡には伊勢の神宮の荘園が数多く設定された。渥美半島突端の伊良湖に行く、伊勢の地が至近距離にあることがよくわかるが、神宮の神官たちが海を渡って渥美郡に乗り込み、各地に「御厨」や「御園」とよばれる荘園をつくりあげていったのである。まず押さえたのは三河湾に面した神戸の地で、ここに「本神戸」が設定された。さらに郡衙の近辺にも神宮の勢力は及び、「鮑海新神戸」などの荘園が成立した。伊良湖御厨から鮑海新神戸に至るまで、半島には多数の御厨や御園が生まれ、渥美半島は神宮の支配地ともいえるような様相を呈した。

また、同じく平安時代の後期のころには、地域の寺院がめだつた繁栄をみせた。豊川市域北辺の山麓にある財賀寺や、豊橋市東端の普門寺（船形寺・桐岡院）は、